

## 10 - 6 2022 年 1 月 22 日向灘の地震による高周波エネルギー輻射量

## High-frequency energy release from the Hyuga-nada earthquake on January 22, 2022

防災科学技術研究所

National Research Institute for Earth Science and Disaster Resilience

2022 年 1 月 22 日 01 時 08 分頃、日向灘の深さ 45 km 付近を震源とする  $M_{\text{Hi}}6.6$  (Hi-net 震源の深さ 43 km, Hi-net マグニチュード  $M_{\text{Hi}}6.7$ ) の地震が発生した。本稿では同地震発生後の地震活動について、連続地震波形エンベロープ解析から得られた 4-20Hz 帯域のエネルギー輻射量推定結果を報告する。

解析に先立ち、第 1 図に示す Hi-net (KiK-net) 地震観測点 (赤三角) の速度波形記録に 4-20Hz 帯域のバンドパスフィルタを施し、3 成分波形を 2 乗和して 1 秒ごとに平均値をとり、密度  $2800 \text{ kg/m}^3$  をかけてエネルギー密度の次元をもつエンベロープを作成した。また、コーダ波規格化法<sup>1)</sup>を用いて N.UMWH 観測点を基準点とするサイト増幅補正を行った。使用した観測点の一部では本震時に強震動による波形の飽和<sup>2)</sup>が見られたため、本震については Hi-net に併設されている KiK-net 地中強震計の加速度記録を積分して速度に変換し、Hi-net 記録と同様の処理を行った。得られた地震波形エンベロープにエンベロープインバージョン解析<sup>3)</sup>を施し、高周波エネルギー輻射量の時間変化を推定した。エネルギー輻射点は余震域の中心付近 (第 1 図中赤丸) に固定した。解析に使用した各パラメータは、 $V_p = 6.58 \text{ km/s}$ ,  $V_s = 3.80 \text{ km/s}$ , 散乱係数  $g_0 = 1.5 \times 10^2 \text{ km}^{-1}$ , 内部減衰  $Q_i^{-1} = 1.0 \times 10^{-3}$ , ガウス型ランダム不均質媒質の速度揺らぎ強度  $\varepsilon = 0.148$ , 相関距離  $a = 5 \text{ km}$  と定めた。

第 2 図 a に、4-20Hz 帯域でのエネルギー輻射量の推移と Hi-net マグニチュードに基づく M-T 図を示す。本震発生から 10 日以内では  $M_{\text{Hi}}4.5$  以上の地震は 6 回発生しているが、その全てが 13 時間以内に発生したものである。最大余震は本震の 4.4 時間後に発生した  $M_{\text{Hi}}5.1$  の地震である。本震に対する最大余震による高周波エネルギー輻射量の割合はおよそ 0.3% である。第 2 図 b, c に、余震による積算高周波エネルギー輻射量と、同量を本震による高周波エネルギー輻射量で規格化した値 (NCER) の推移をそれぞれ示す。本震発生から 10 日後までの余震による積算エネルギー輻射量は、本震の高周波エネルギー輻射量の 0.95% である。

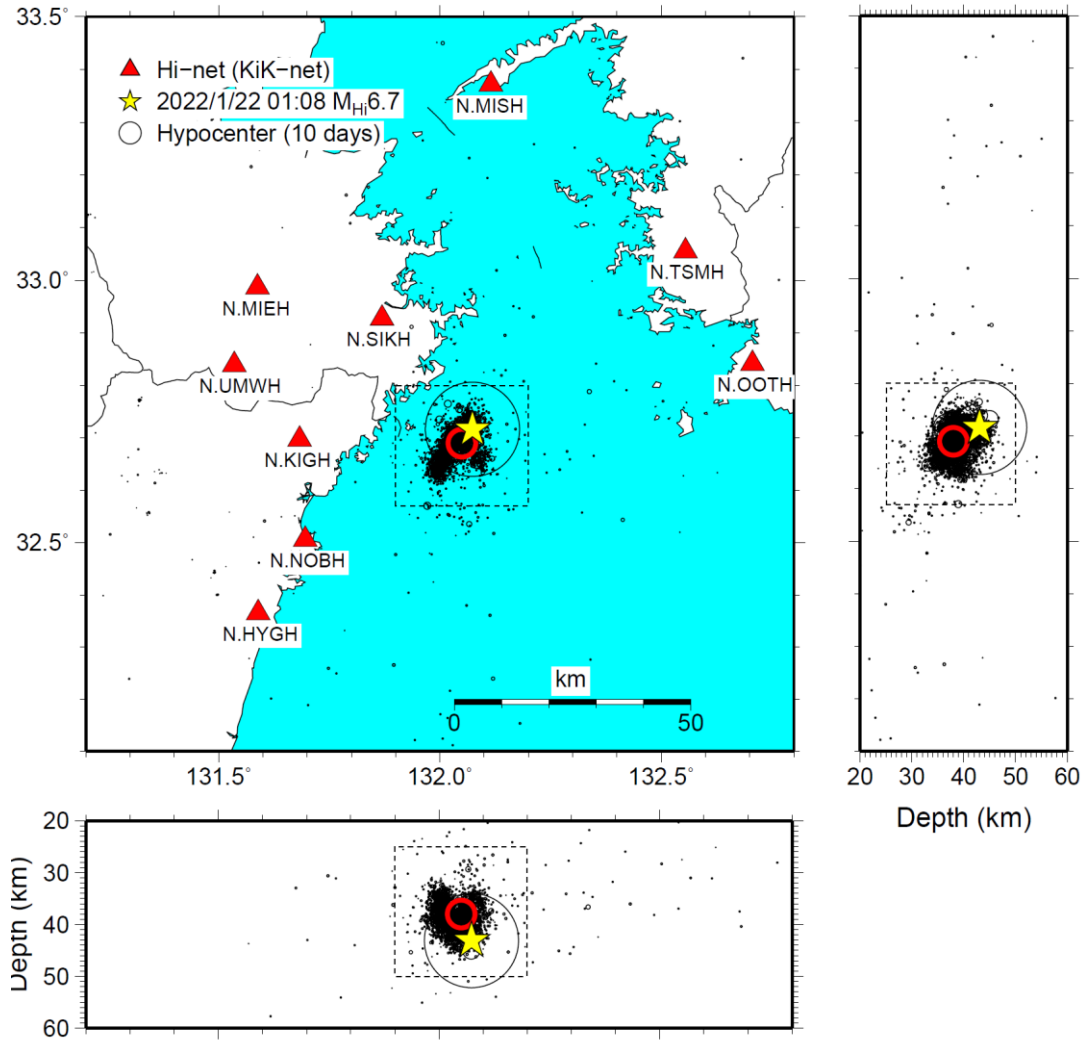
第 2 図 b, c には、2016 年 4 月に発生した熊本地震の本震 ( $M_{\text{Hi}}6.7$ ) と、2021 年 10 月に発生した千葉県北西部の地震 ( $M_{\text{Hi}}6.4$ ) についての解析結果も併せて示す。日向灘の地震の Hi-net マグニチュードは熊本地震と同程度であるが、余震による積算エネルギー輻射量とその本震に対する相対値は、いずれも熊本地震より一桁ほど小さい。一方、これらの値は千葉県北西部の地震よりはいずれも一桁ほど大きく、日向灘の地震の余震活動の活発さは熊本地震と千葉県北西部の地震の中間程度と考えられる。

(澤崎 郁)

SAWAZAKI Kaoru

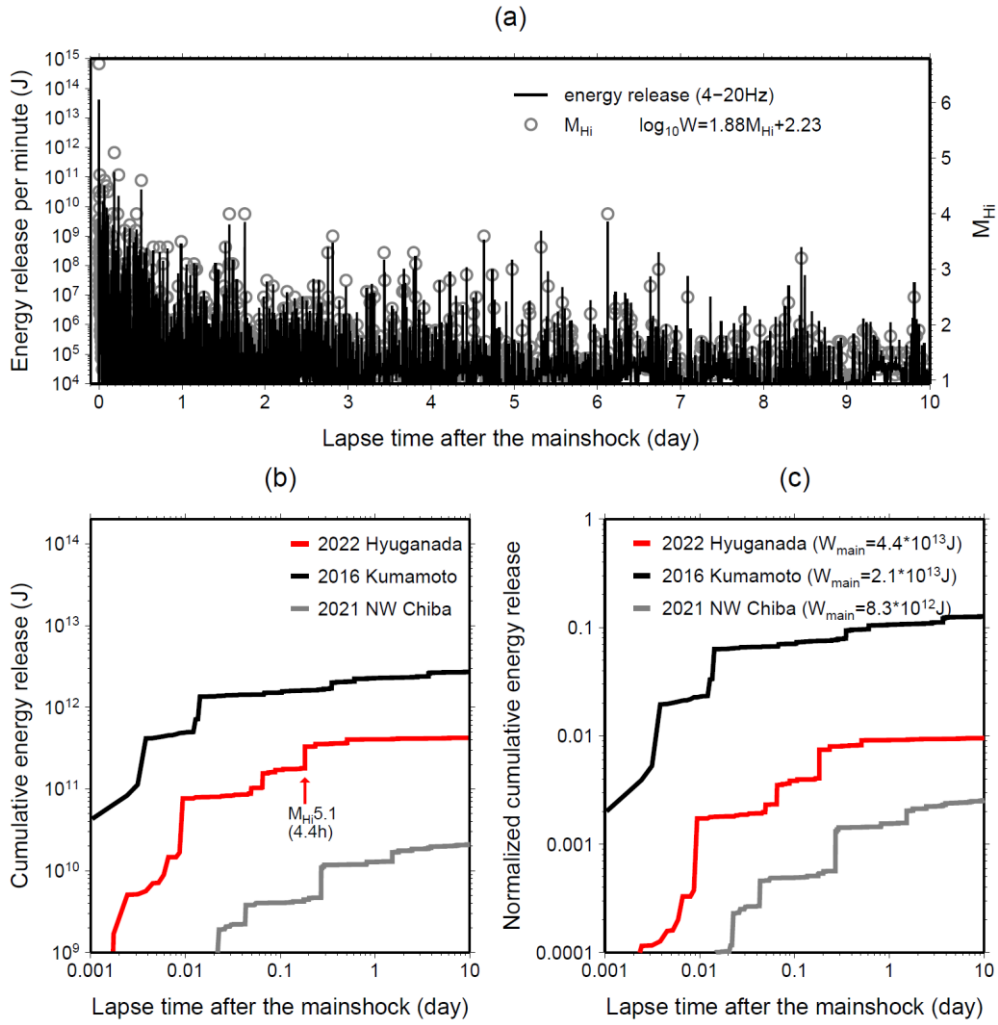
参考文献

- 1) Phillips and Aki (1986), *Bull. Seism. Soc. Am.*, **76**, 627-648, <https://doi.org/10.1785/BSSA0760030627>
- 2) 汐見勝彦・他 (2005), *地震 第 2 輯*, **57**, 451-461, [https://doi.org/10.4294/zisin1948.57.4\\_451](https://doi.org/10.4294/zisin1948.57.4_451)
- 3) Sawazaki et al. (2016), *Earth Planets Space*, **68**, 183, <https://doi.org/10.1186/s40623-016-0557-3>



第 1 図 Hi-net 震源に基づく日向灘の地震の震源(黄星印), および本震後 10 日間に発生した地震(黒丸)の震源分布. 三角および赤丸印は, 高周波エネルギー輻射量推定に使用した Hi-net (KiK-net) 観測点, および設定したエネルギー輻射点の位置を示す.

Fig. 1 Location of Hi-net hypocenters of the 2022 Hyuga-nada earthquake (yellow star) and its aftershocks occurring within 10 days (black circles). Triangles and red circle represent Hi-net (KiK-net) stations and the assumed energy release point, respectively.



第 2 図 (a)本震発生後 10 日間の 4-20Hz 帯域のエネルギー輻射量の推移(黒線, 左縦軸), および Hi-net マグニチュードに基づく M-T 図(灰色丸, 右縦軸). エネルギー輻射量  $W$  と  $M_{Hi}$  との関係は, 第 1 図の点線で囲まれた領域で発生した  $1.5 \leq M_{Hi} < 4.5$  の地震について最小二乗法により推定し,  $\log W = 1.88M_{Hi} + 2.23$  としている. (b) 本震発生直後からの 4-20 Hz 帯域の積算エネルギー輻射量の推移. 赤, 黒, 灰色の線はそれぞれ今回の日向灘の地震, 2016 年熊本地震の本震, および 2021 年千葉県北西部の地震に伴い発生した余震による積算エネルギー輻射量. 最大余震 ( $M_{Hi}5.1$ ) の発生時刻(括弧内)を赤矢印で示す. (c) 図(b)の積算エネルギー輻射量をそれぞれの「本震」によるエネルギー輻射量で規格化した相対積算エネルギー輻射量 (NCER) の推移.

Fig. 2 (a) Time-lapse change in the 4 – 20 Hz energy release rate (black curve, left ordinate) and the M-T plot of Hi-net magnitude (gray circles, right ordinates). The relationship between the energy release  $W$  and  $M_{Hi}$  was estimated as  $\log W = 1.88M_{Hi} + 2.23$ , where earthquakes within the range of  $1.5 \leq M_{Hi} < 4.5$  occurred inside of the dashed rectangle area in Fig. 1 were used for the estimation. (b) Cumulative 4 – 20 Hz energy release by the aftershocks for each of the 2022 Hyuga-nada earthquake (red), the 2016 Kumamoto earthquake (black), and the 2021 NW Chiba-prefecture earthquake (grey). Red arrow indicates occurrence of the largest aftershock ( $M_{Hi}5.1$ ) with the lapse time after the mainshock in the bracket. (c) Same to Fig. 2(b) except that the cumulative energy releases are normalized by the energy released by their “mainshock” (Normalized Cumulative Energy Release; NCER).